



6/6吉田町国安の郷にて

きずな
SPECIAL
interview
vol.10

尺八演奏家

中村 仁樹さん

なかむら まさき

宇和島出身の新進気鋭の尺八奏者がいるという話を聞いたのは、もう何年も前のことだ。

今回、「よしだおんがくどう」さんの取材をご縁に対談が実現した。

尺八との二度の出会い

中村仁樹さんの人生最初の尺八との出会いは、七歳くらいの時までさかのぼる。父(浄念寺住職)が檀家さんから勧められて尺八を始める。それに巻き込まれるかたちで尺八を始める。

しかし、二ヶ月で興味を失い、父も一年位でやめてしまう。それからしばらく尺八の事は忘れてしまう。

中学生になって兄(浄念寺の後継者として頑張っている)に影響されて、エレクトリックギターを始める。高校生になると、自分の進路について「作曲の仕事がしたい」と思うようになる。

ある時ふと、子どもの頃習っていた尺八の事が気になり、納屋にしまい込まれていたのを発掘(笑)して、吹いてみるが、やっぱり鳴らない。音楽の道に進みたいと言う漠然とした思いのなかギターとピアノに囲まれる日々を過ごす。

そんなある日、母の友人で琴の先生をされている方から「東京の尺八の偉い先生に会いに行くから、会ってみたら」と誘われる。「日本一の先生なら、鳴らなくても(尺八が)良いから一度お会

いしたい」と思い上京する。そこで今まで聞いたこともない尺八の世界に触れ、尺八の奥深さを知る。

それからしばらくして、ちょっとした怪我をしてしまい、ピアノやギターが思う様に弾けなくなってしまう。「それならちょっと尺八、吹いてみるか…」と再び自ら尺八を手にするのである。

これを機に、一気に尺八の世界に舵を切ることになる。本人曰く「尺八十度方向が変わりました(不意のオヤジギャグに爆笑)」

東京の師匠が月に一度工房のある今治にいらっしやるという幸運にも恵まれ、稽古をつけてもらう事になる。しかし、この時点でもまだ「日本の音楽」を十分理解出来てなかったと振り返る。(当然だ、ついちょっと前までロックやクラシックと言った洋楽にどっぷり漬かっていただけだから)そして「自分で吹いてみれば、それも自ずと理解できるかもしれない…」と、練習を続け、その後、愛媛での師匠も出来、いよいよ本格的な尺八人生が始まる。

母からの思わぬ提案

高校三年のある日、母が嬉しそうに「東京藝大に尺八専攻があったよ、受けてみんかな…」と、突然の提案を受ける(本人曰く「普通の親なら音楽の道へ進みたいといったら絶対反対されるどころが我が家は違ったんです」。悩んだ

末に、高校二年になって東京藝大を目指す事になる。

それからは毎日尺八と琴の練習に明け暮れる日々が続く。

その甲斐あって夏には琴の准師範の免許を取り、九月に初舞台となる南予文化会館で「春の海」を演奏する。本人曰く「：当時の写真を見ると、お地藏さんみたいにガチガチに緊張していて…」と話す。初舞台も無事終え、いよいよ藝大受験にむけて尺八漬けの日々を送る。多い日には十時間も尺八を吹き続けた。そんな努力の甲斐あって見事合格を果たす。

大学時代

大学へ行くと「周りには音楽の魅力に取りつかれた音楽バカばかりで、すごい楽しくて、まさに自分の居場所という感じがして、のびのびと音楽だけ出来ましたね…」と振り返る。

尺八の魅力

「尺八にはピアノやギターにはない、かすれる音や微妙なニュアンス、「わびさび」が表現できるんです。音にならない音も尺八ならではの表現です。師匠はそれを「毛筆で水墨画を描くような感じで表現する。そしてその余白にも音楽がある…」と言われます。僕自身もそんな日本独自の音楽の世界観に引き込まれました。尺八には、まだま

だ沢山の可能性があると思います」と話してくれた。

実際、吉田町の国安の郷でのライブはそれを具現化した様なものだ。琴との伝統的なものももちろんのこと、ピアノやソフランドとのセッションは、今まで聴いた事のない新しい音楽の世界だ。まさに尺八の可能性を見せつけられた感じだ。



ピアノ、声楽、琴との絶妙なアレンジだった(国安の郷にて)

今後は

クラシカルな事や作曲、コラボレーションなど、やりたい事は山ほどある。モンドラナミュージックエンターテインメントに所属も決まった。

そして続けて、「今まで以上に沢山の人が自分の音楽を聴いて頂ける環境が整ってきたと思います。やはり自分にとっての全て、極めるべきものは尺八なので、今後は、それをひたすら突き

詰めていく事と作曲に磨きをかけていきたいと思います。

とにかく自分が感動できる演奏曲を創り続けて、それを会場に足を運んで「中村仁樹」を聴いて頂きたい。たとえそれが大きなホールであろうが、公民館のようなところでも会場に関わらず、より多くの人に「尺八」の音色を親しんで頂きたいです」と静かに語ってくれた。



6/3に吉田小学校で行われたミニコンサートの様子。こうして、子どもたちに質の高い生の音楽を聴く機会を与えることは非常に意義深い。

取材を終えて

今回、中村さんの尺八を生で聴いて、邦楽の新たな可能性を垣間見た気がする。世の中はニューミュージックやポップスにあふれている。この事を否定するものではないが、我々日本人として我が国独自の進化を遂げて来た邦楽の世界を大切にしてゆかなければならないと思った。

中村 仁樹 (なかむら まさき)

1983年 宇和島市にて生まれる

2001年 宇和島東高等学校卒

同年 東京藝術大学音楽部邦楽科尺八専攻入学。

卒業後は和と洋、古典とジャズ、ポップスなど様々なジャンルを自在に行き来して活躍中。演奏会として各地のコンサートやイベントに出演すると同時に、作・編曲、レコーディングにも多数参加。第6回尺八新人王決定戦優勝・第3回東京邦楽コンクール優勝・第2回和洋楽器コンテストグランプリ・他受賞多数

インタビュ어의雑談のなかで、こんなアイデアがひらめいた。宇和島出身の茶道家木村宗慎さんと中村仁樹さんが天赦園で、宇和島伊達文化と若き日本文化伝承者が織りなす「和」の世界…

実現してみたいものだ。

(川尻 純滋)